



Gold Link Corporation

GOLD FOURSEASONS REPORT

2021年秋号

発行日 令和3年10月1日

目次：

2021年	1
第2四半期	
世界金需要	
プラチナ展望	6

2021年第2四半期の世界金需要

○要約

世界の金ETFは、第2四半期に40.7トン（25億米ドル）の流入を記録しました。流入は欧米市場に集中しており、米国、ドイツ、フランスでは運用残高が2桁の伸びを示しました。

米ドル金価格は第2四半期平均で1,816.5米ドル/1オンスとなり、2020年第2四半期比で6%の上昇となりました。第2四半期における金価格は、ETFへの流入および買建玉正味残高の下支えにより4.3%の値上がりとなりました。

第2四半期における金の総供給量は前年同期比で13%の増加となり、上半期では4%の増加となりました。業界が経験した新型コロナウイルス感染症関連の混乱は、最も混乱した2020年の第2四半期よりははるかに落ち着いています。

○第2四半期の金需要は横ばい

第2四半期における消費者需要の力強い回復と金ETFへの流入は、第1四半期に発生した激しい流出を相殺するまでには至りませんでした。

第2四半期の金需要（店頭取引を除く）は、ほぼ2020年第2四半期と同水準の955.1トン（1%減）となりました。

第2四半期の宝飾品需要（390.7トン）は、新型コロナウイルス感染症により打撃を受けた2020年の低迷からは回復を続けていますが、インドの需要が伸び悩んだこともあり、パンデミック前の典型的な水準を大きく下回りました。

金地金・金貨への投資額は、4四半期連続で前年同期と比べて大幅に増加しました。第2四半期の需要が243.9トンとなりました。

金を裏付けとするETFは第2四半期に小幅な流入（40.7トン）となりましたが、

(2ページに続く)

■世界金需要						
	Q2.20	Q3.20	Q4.20	Q1.21	Q2.21	前年同期比
宝飾品	244.5	332.9	510.3	483.0	390.7	+60%
エレクトロニクス	57.2	63.2	69.2	66.2	66.3	+18%
その他	8.3	10.9	11.8	11.9	10.8	+31%
歯科	2.6	3.1	2.9	2.9	2.9	+12%
工業・歯科小計	68.1	77.2	83.9	81.0	80.0	+18%
金塊退蔵	93.6	114.3	170.3	230.7	168.1	+79%
公的金貨	51.6	84.1	78.4	102.0	63.5	+23%
メダル類	11.5	22.6	20.5	18.1	12.3	+7%
小売り投資小計	156.7	221.0	269.2	350.8	243.9	+56%
ETF・関連商品	427.5	273.9	-131.3	-170.0	40.7	-90%
投資合計	584.2	494.9	137.9	180.8	284.6	-51%
中央銀行購入	63.7	-10.6	61.0	133.3	199.9	214%
需要合計	960.5	894.4	793.1	878.1	955.2	-1%

2021年第2四半期の世界金需要

第1四半期に発生した大規模な流出を一部相殺しただけにとどまりました。

中央銀行は第2四半期も購入を続けました。世界の金準備は199.9トン増加し、上半期の正味購入量は333.2トンとなり、過去5年間の上半期の平均を39%、過去10年間の上半期の平均を29%上回りました。

○投資家心理は好転し、第2四半期の金価格の上昇に貢献しました。

今後を目を向けると、2021年の起こりうる基本ケースとして、宝飾品や金地金・金貨の需要が続伸し、2020年に比べて金ETFの流入額や店頭取引の投資額は減少すると想定しています。

○第2四半期のレビュー

金価格は、第1四半期に10%下落した後、第2四半期に4%の上昇となりました。4月から5月にかけては、引き続きインフレ懸念、米ドル安、および実質金利の低下を背景に金価格は持ち直しましたが、6月には米国連邦準備制度理事会（Fed）による声明が予想以上にタカ派的な発表となったことを受けて再び下落しました。

第2四半期の価格回復の多くは、以下の組み合わせによるものだと考えられます。

- 期待インフレの高まりとインフレサプライズに対する懸念
- ドル安
- 金利の引き下げ

これらの要因により、金に対する投資家心理は持ち直しを見せました。世界の金ETFからの流出は、4月に急激に減少した後、5月に反転し、第2四半期は40.7トンの純流入となりました。その結果、4月と5月には買建玉正味残高が強気に転じました。店頭取引投資と密接な関係にあると思われるニューヨーク商品取引所における金先物の正味残高は、430億米ドルに跳ね上がり、これは731トンに相当し、2月以来の高水準となりました。その後、FRBの声明を受けて6月に買建玉正味残高が減少したものの、3月末の安値を上回っており、ショートポジションは比較的控えめな状態が続いています。要約すると、この分野の金投資に対する投資家心理が持ち直しを見せ、第2四半期の大半において、中央銀行による堅実な買いとともに金価格を下支えしたと考えられます。

消費者の需要は、2020年の水準から引き続き回復していますが、パンデミックの影響で、特に宝飾品の需要が大幅に減少しました。

第2四半期の宝飾品需要は前年同期比では大きく回復しましたが、第1四半期以降は減速し、長期的な平均値と比較すると相対的に弱い状態が続いており、パンデミック前の「通常」のレベルに戻るにはもう少し時間がかかることを示唆しています。

○投資

☆金ETF

ETFの流出は、4月に急激に減少した後、5月に反転し、第2四半期は40.7トンの純流入となりました。この流入は、利下げや安全な避難先

■主要国需要				■世界金供給									
	2021年第2四半期			前年同期比			Q2.20	Q3.20	Q4.20	Q1.21	Q2.21	前年同期比	
	宝飾品	投資	合計	宝飾品	投資	合計							
インド	55.1	21.0	76.1	25%	7%	20%	793.9	922.4	925.5	858.6	924.0	+16%	
中国	152.0	59.7	211.7	61%	40%	55%	生産者ヘッジ	-37.2	-21.3	-28.1	8.7	-28.9	---
中東	36.5	8.1	44.6	190%	-23%	93%	鉱山生産小計	756.7	901.1	897.4	867.3	895.1	+18%
トルコ	8.1	4.1	12.2	104%	-79%	-49%	リサイクル	282.2	375.7	324.9	268.9	276.6	-2%
日本	3.5	-3.3	0.2	40%	--	113%	供給合計	1,038.9	1,276.8	1,222.3	1,136.2	1,171.7	+13%
米国	37.7	30.0	67.7	103%	111%	107%	注1:単位はトン						
欧州	13.4	74.0	87.4	76%	6%	12%	注2:上記のQは四半期						
							注3:前年同期比はQ2.20とQ2.21との比較						

2021年第2四半期の世界金需要

資産としての需要の高まりによる金価格の上昇に後押しされた2020年第2四半期の427.5トンという巨額の資金流入の10%にも満たず、全体の投資額が前年同期比で大幅に減少した要因となっています。2020年上半期は731.2トンの流入を記録しましたが、対比的に当上半期は129.3トンの純流出となりました。

4月から5月にかけて金価格が上昇するにつれて、北米および欧州のファンドへ資金が流入し、第2四半期の回復の大きな要因となりました。これらの地域のファンドでは、この期間に合計43.8トン（27億米ドル）の増加となりました。低金利環境が続き、6月には金価格が下落したこともあり、インフレに対する根強い懸念がこれらの資金流入の原動力となったと考えられます。ドイツのファンドが、欧州全体の流入額（27.2トン、16億米ドル）の約半分を占めており、特に6月にはこの地域の資金流入を牽引しました。この地域の関係者によると、6月の金価格の値崩れが買いを入れる好機とみなされ、これらの資金流入を後押しする一翼を担ったと強調しています。

株式市場のボラティリティの高まりと、パンデミックの渦中における安全な避難先資産としての需要が、第2四半期もインドの金ETFへの資金流入を促しました。インドの上場ファンドへの純流入は2.4トンとなり、当四半期末の総保有額は34.2トンに達しました。また運用資産残高は21億米ドルとなり、2013年3月以来の高水準を記録しました。

☆金地金・金貨

第2四半期の金地金・金貨への投資は、前年同期に比べて力強い成長が見られ、56%増の243.9トンとなりました。これは、好調だった第1四半期の実績を下回ったものの、5年間の平均値である252.8トンと同程度の水準です。上半期の合計は594.5トンに達し、2020年比で45%増、2013年以来の高水準となりました。上半期の投資額は、米ドルベースで60%増の340億米ドルとなり、8年ぶりの高水準となりました。

前年同期比では、2020年に発生した新型コロナウイルス感染症関連の混乱からの継続的な回復

により増加しましたが、前四半期比では、価格変動の値動きを反映して減少しました。

世界の地金需要は前年同期比で最も高い伸びを示し（18%増）、公式金貨の需要はより緩やかな伸びを示しました（7%増）。

◆中国

中国の第2四半期の金地金・金貨の需要は合計57.3トンとなり、前年同期比で41%増加し、2019年第2四半期比でも16%上回りました。この結果、上半期としての合計は143.3トンとなり、2020年上半期の77.7トンを大幅に上回り、2019年上半期よりも19%の増加となりました。前年同期比で急増したのは、基本的な部分への影響が小さかったこと、経済状況が大幅に改善したこと、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる影響が大幅に減少したことなどが主な要因です。

中国における金地金・金貨投資は、主に富の拡大と現地金価格の変動によって影響を受けることがわかっています。現地金価格の平均値は、2018年下半年より上昇してきましたが、2021年上半期は2020年下半年の平均値よりも7%低く、一部の投資家が長期的な利益を期待して、価格の下落に乗じて購入する動きがありました。

一方で、2020年や2019年に比べて2021年上半期の可処分所得が伸びたことで、現地の投資家が価値の貯蔵手段として金を購入するようになり、中国の金地金・金貨の販売が好調に推移したことも考えられます。中国における金地金・金貨への投資は、健全な経済により引き続き支えられると考えています。健全な経済により所得水準は保たれ、また、生産者物価指数が数年来の高水準で推移していることから、徐々にインフレ圧力が高まっていく可能性があると考えています。

◆インド

インドにおける金地金・金貨への第2四半期の投資は、主に2020年第2四半期の水準が低かったことにより、前年同期比で7%の増加となりました。しかし、第1四半期に需要が急増したあと、第2四半期は前四半期比で44%減の21トンとなり、上半期では合計58.6トンとなりました。この

2021年第2四半期の世界金需要

値は、2020年上半期よりは23%高いものの、2019年上半期比で25%下回り、2015年から2019年までの上半期平均比でも20%下回るなど、過去の実績からみると低い水準となっています。宝飾品市場と同様に金地金・金貨への投資も、押し寄せる新型コロナウイルス感染症第2波に対抗するために実施されたロックダウンによって多大な影響をこうむりました。その結果として、5月のアクシャヤ・トゥリティーヤの祝祭期間に投資需要は低迷することになりましたが、デジタル金の需要が好調だったことで、この低迷を一部相殺することができました。6月の国内金価格の引き下げは、個人投資家の買いを入れる好機となり、小額金貨(4g、8g)が個人投資家の間で人気を博していると考えられています。

トルコの個人投資は第2四半期に急減しました。金地金・金貨の需要は、第1四半期に急増したあとに急激に反転し、前年同期比で79%減、前四半期比では91%減の4.1トンとなり、2008年第4四半期以来の低水準となりました。情報によると価格変動が大きくなったことが要因として挙げられており、また、インフレ率の高騰が投資家の購買力に影響を与えていることがわかりました。

米国の金地金・金貨の需要は、好調な第1四半期をほぼ再現したものでした。個人投資家は第2四半期に30トンを購入し、上半期の需要は過去最高の61.7トンとなりました。これは2020年の年間総需要をわずかに11%下回る記録です。需要の背景には、低金利、インフレ懸念の高まり、可処分所得の増加(政府の景気刺激策により増加)など、最近の好調さを支えてきた要因が継続しており、その一方で、自由裁量の消費先が制限されていることも挙げられます。

米国造幣局は、造幣局創立35周年を記念して、新デザインのイーグル金貨を四半期末に発表しました。造幣局によると、新デザインを求める投資家からの反響が大きく、6月は相当数の販売を記録したと公表されています。

欧州における第1四半期金地金・金貨への投資は、堅調な推移となりました。第2四半期の需要は前年同期比6%増の74トンで、上半期合計は146トンとなり、これは2020年上半期(143.3トン)をわずかに上回る結果となりました。インフレや低金

利への懸念が続いていることを反映して、当四半期のほとんどの期間において取引量は増加したとされています。6月に金価格が下落したことで、当四半期末に向けてさらに拍車がかかりました。

○中央銀行の金への関心が再燃。

世界の中央銀行による上半期の購入量は333トンで、過去5年間の上半期の平均を39%上回りました。

タイ、ハンガリー、ブラジルによる大量購入により、金準備の積み増しは3国合計で207トンになりました。

中央銀行が3四半期連続で買い越したことにより、世界の金準備は第2四半期に199.9トン増加し、四半期の買い越し量としては2019年第2四半期(227.8トン)以来の高水準となり、5年間の四半期平均を73%上回りました。これにより、上半期の買い越し量は333.2トンとなり、2020年上半期比で63%、過去5年間の上半期平均比で39%の増加となり、上半期の10年平均比を29%上回りました。

2020年後半は比較的弱含みの状態が続きましたが、2021年前半には需要が回復し、特に第2四半期に約3分の2の需要が集中する形となりました。IMF(国際通貨基金)によると年初来6期までの合計購入量は287.7トンで、9つの中央銀行がその大部分を占めています。

上半期に最も多く購入したのはタイで、金準備は90.2トン(60%)の増加となりました。IMFの最新データによると、タイの金準備は244.2トンで、金準備全体の6%を占め、過去最高水準となっています。タイ中央銀行のセタプット・スティワートナルプット総裁は、金は「安全性、収益性、分散性、テールリスクヘッジという主要な準備資産管理の目的を満たすもの」であると指摘しています。

当四半期の買い越しに加えて、中央銀行や公的機関が将来的に金の運用残高を増やす予定であるという報告がいくつかあげられています。これは、中央銀行が引き続き金を肯定的に見ていることを示しています。

ロシアのアントン・シルアノフ財務大臣は、ロシアの公的年金基金であるナショナル・ウェル

2021年第2四半期の世界金需要

ス・ファンド（NFW）の資産の20%を金に投資することを発表しました。これは、ロシアの脱ドル政策の一環であり、NFWは保有ドルの売却を完了しています。この動きは、ロシア中央銀行が2020年3月に金積み増し計画を中断したにもかかわらず、ロシアの公的部門にとって金が依然として重要な資産であることを示しています。

また、ボリビアのルイス・アルセ大統領が、中央銀行が国際準備金を強化するために国産の金を購入できるようにする法案を提出しました。マルセロ・モンテネグロ経済大臣は、次のように述べています。「毎年2～4トンの金を購入し、これを精製して貨幣用金にすることを目指しています。」

セルビアのアレクサンダル・ヴッチ大統領は、金準備を増大させ、5分の2程度上乘せする計画を発表しました。セルビアの中央銀行は現在36.3トン保有している金の運用残高を50トンに設定したのです。積み増す時期については具体的には示されていませんが、同国の財政面の安定性向上のために行われた2020年11月の3.2トン、2019年10月の9トンという注目すべき購入に続くものとなります。

最近の需要回復の多くはハンガリーとタイからの購入でしたが、多くの新興市場の中央銀行が大きな関心を寄せていることから、今年の残りの需要については、ポジティブな見通しです。

トルコは、ここ数四半期にわたり定期的に活発な動きを見せている中央銀行のうちの1つですが、上半期に13.5トンの金を積み増し、公的部門の金準備は408.2トン（金準備全体の29%）となりました。

ブラジルも上半期には同じく重要な買い手となり、5月から6月にかけて53.7トンの金を積み増し、2012年11月以来の大幅な増加となりました。これにより、金準備は121.1トン（金準備全体の2%）となり、2000年11月以来の高水準となりました。ポーランドは、近年、金準備を大幅に増やしている中・東欧諸国のひとつです。そのほか、年初来6月期に金買い越しの常連となったのは、ウズベキスタン（25.5トン）、インド（29トン）、カンボジア（5トン）、モンゴル（1.8トン）です。

○今後の見通し

☆宝飾品

宝飾品需要は、2020年の水準を大きく上回るものの、過去5年間の平均値を下回る1,600～1,800トン程度になる可能性があります。世界経済の継続的な回復は、2021年を通して世界の宝飾品に対する消費者需要を支えるものと思われますが、一部の市場（特にインド）では新型コロナウイルス感染症による混乱が続いており、それが向かい風となるでしょう。滞留していた需要が後押しとなる可能性はあるものの、別の強力な新型コロナウイルス感染症の変異株による新たな波が来れば、さらなる課題が出てきますが、昨年のような低水準の宝飾品需要が繰り返される可能性は極めて低いと考えています。

☆投資

2021年の投資需要は順調に推移し1,250～1,400トン程度と、昨年よりは減少するものの、10年平均と同程度の水準になると考えられます。金地金・金貨の需要は、インフレ率の上昇やここ2、3年の力強い金のリターンを背景に増加し、1,100～1,250トンに達する可能性があります。一方、ETFの投資額は、2020年の記録的なペースを維持できないことはほぼ確実です。その代わりに、利回りの上昇と金融市場の投資家心理の好転を背景に、年間流入量は10年平均の150トン以下となり、2020年と比較して、需要はより持続可能なレベルに戻ると予想しています。

☆中央銀行

中央銀行は、分散投資とリスク管理を引き続き重視することから、2021年も2020年と同程度かそれ以上の割合で正味ペースでの金の購入を継続すると思われます。ある中央銀行調査の結果は、この見解を支持するものであり、調査に関係した中央銀行の5分の1が今後12ヵ月間に準備金を増やすことを考えています。

プラチナ展望

現在のプラチナの需給バランスとネガティブセンチメント（弱気）の元となっている情報は、2021年の間に起こっているいくつかの重要な動きを正確に反映していない可能性があります。それらは

- 1) 2021年と2022年の鉱山供給の増加は一時的なものであること、
- 2) 自動車のプラチナ需要は半導体不足にもかかわらず増えていること
- 3) 不可解な現象として中国のプラチナ輸入が急増し、パラジウム輸入が減っていること
- 4) 考えられているよりもはるかにプラチナが手に入りにくいこと

の4点です。

1. 今年の鉱山供給が増えているのは、一つには2020年のような感染症拡大による鉱山閉鎖やACP転炉の停止がなく操業できているからです。2021年に鉱山から採掘されたものと、昨年蓄積された材料（製錬過程後、ACP転炉処理前）を処理したことによる追加の精錬プラチナは通常全て精錬プラチナに加工・販売されるが、当初の予測では約15.6トンの蓄積在庫のうち、2021年中に加工されるのは6.2トンで、残りの9.3トンの処理は2022年になるとしていました。しかし2021年上半期の加工が増えたことで、それを変更して9.3トンを2021年の鉱山生産予測に入れ、残りの6.2トンを2022年の鉱山生産予測に加えました。このように第2四半期と年間予測の両方において供給余剰の原因となっている2021年の供給の増加は一時的なもので、2022年の終わりには供給増は解消しているでしょう。また2021年の鉱山生産は、2019年と2018年レベルよりも低い上に、2022年末の予測レベルと同じであるという点も忘れてはならないでしょう。
2. 自動車需要は、2020年の前半に感染症拡大の打撃を受けて激減した生産と販売が回復して今年の前半は36%の伸びとなりました。実際、世界中で半導体不足が起こり生産の回復率に影響を与えたにもかかわらず、自動車セクターのプラチナ需要はコロナ禍以前のレベルにまで持ち直し、2021年下半期は2017年の下半期以来の高い水準になるでしょう。自動車生産台数の増加のみならず、欧州、北米、中国など主要自動車市場において厳格化する排ガス規制に対応するために浄化触媒装置に使うプラチナの量が増えたことと、プラチナのパラジウム代替が進んだことなどが、2019年の需要を超える予測となる背景です。2021年初めに中国で普通乗用車に「国6a」規制が、今年半ばには全ての大型車に対して「国VI」排ガス規制が適用され、欧州では「Euro 6d/temp」規制、米国では「Tier 3」の段階的導入などが、2021年さらにその後の自動車のプラチナ需要の成長を牽引する要因となるでしょう。
3. 今年中国のプラチナ輸入量の急増は想定外で、需要予測データからも説明が付きません。今年7月までの中国のプラチナ輸入量は毎月増えており、過去最高の59.7トンとなりました。第2四半期の輸入量は記録に残る中で四半期としては最も多く、工業と自動車需要の急増がその理由であると考えています。自動車触媒装置でパラジウムの代わりにプラチナを使う代替の動きは公表されていませんが、同時期の中国のパラジウムの輸入は去年の46%と大幅に減っていることには注目すべきでしょう。この輸入量データのみから中国の代替の動きを証明することはできませんが、現在予測されているよりも多くのパラジウムがプラチナにとって代われ、そして代替のスピードも速いと考えて良いのではないのでしょうか。
4. 第2四半期の終わりからのプラチナ価格の下落傾向は、プラチナリースレートが急激に上がったまま下がっておらず、プラチナが手に入りにくいという事実と反するように見えます。プラチナリースレートはマーケットからプラチナを借りる際の年間コストで、1ヶ月リースを見るとコロナ禍以前の4年平均レートは0.1%でしたが、7月半ばには2.5%以上に上がりました。これは予想以上の需要に対応するためにプラチナが調達できないことが背景にあるとみられます。つまり契約上プラチナを調達しなければならない業者らが従来通り市場で買おうとし

プラチナ展望

でも現物を持つ売り手が見つからず、リースしなければならない状況か、あるいはパラジウムとロジウムの高騰で資金が少なくなつてリースを選択したということだと思われます。しかし、リースレートの高騰は、NYMEX先物保有者らが5.0トン以上の現物引渡しを行った時期に起こっている事から、純粹にプラチナの現物が不足していると考えるのが妥当でしょう。

需要増の可能性

自動車触媒装置のプラチナ使用量の急増、代替へのプレッシャーの継続、工業生産能力の増大、水素経済への関心の高まり、これらがプラチナ投資需要の増加を支えるプラチナの短期的な需要が増加する可能性は、今年予想される余剰に対する懸念を払拭するでしょう。正確な情報がさらに広まり、前述の動きに注目が集まれば、最近の投資需要の流れが変わるでしょう。

需要が伸びる可能性の根拠は 1) 大型車の生産増加と浄化触媒装置のプラチナ使用量の増加 2) パラジウムに代わってプラチナを使う代替の動きの加速、 3) 工業需要の成長、 4) 急成長している水素経済への関心があげられます。

1. 2021年の普通乗用車(LV)予測の下方修正で、投資家の間には自動車のプラチナ需要に対する懸念が生まれましたが、大型車(HD)生産は、半導体不足の問題に比較的影響を受けていないようです。国際自動車工業連合会(OICA)によると、2020年の大型車セクターは、世界で生産台数が5%増えて約436万台となりました。コロナ禍に打撃を受けた普通乗用車と対照的だったこの予想外の成長の主因は、31%急増した中国の大型車生産にあります。2021年上半期、インフラと建設に重きをおいた景気刺激策で大型車セクターが潤う中で、中国の大型ディーゼル車生産は約100万台と20%増え、北米市場は33%、欧州市場も34%の生産増加となりました。このように好調な大型車生産と厳格化する排ガス規制が自動車のプラチナ需要増の大きな支えとなっています。中国の「国VI」排ガス規制は格段に「国V」規制より厳しく、2021年7月より全国の大型車に適応されています。ジョンソン・マッセイ(JM)によると規制遵守のため、浄化触媒装置のPGMの量は3倍になるとしています。中国の大型車生産と販売はインフラと建設投資と強い結びつきがありますが、2021年下半期は経済成長鈍化への懸念からインフラ投資が増えると予測され、大型ディーゼル車の生産も増えるでしょう。さらに大型車一台につき使われるプラチナの量を考慮すると、プラチナ需要はさらに増える可能性もあります。中国の排ガス規制は、今や世界で最も厳しい水準にあるが、ジョンソン・マッセイの予測による「国VI」規制に対応する大型車のプラチナ使用量は、北米の約50%となっています。半導体不足問題に対する懸念は現在必要以上に取り沙汰されている面もあり、自動車生産予測は変動しています。しかし、今年後半に半導体問題が解消するにつれ、コロナ禍と今年前半の半導体問題で抑えられていた自動車需要で普通乗用車セクターは上向き可能性があり、そうなれば今年残りと2022年にも自動車生産はさらに増えることもありうるでしょう。

2. パラジウムとプラチナの価格差は2018年平均の150ドル/オンスから2021年第2四半期には1600ドル/オンス以上に開いたにもかかわらず、プラチナ需要に代替の影響が明らかになるのは数年後、年間約46.7トン以上となるというマーケット分析があります。しかし、公表されている自動車のプラチナ需要は自動車生産の伸びよりも速いペースで増えており、浄化装置のプラチナ使用量の増加を加味しても、代替のプラチナ量の増加も静かに進行していることを示唆していると思われます。

ホームページもご覧下さい。
<http://www.goldtsumitatekun.com>

株式会社ゴールドリンク

 Gold Link Corporation

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号多幸
ビル九段10階

電話 03(5275)5588

FAX 03(5275)5677

Email: info@goldtsumitatekun.com



GOLD FOURSEASONS REPORT

2021年秋号

2010年9月1日創刊 2021年10月1日発行 通巻第43号

●本誌に掲載されている情報は内容が正確であるよう最善を尽くしておりますが、内容についての一切の責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている情報に基づいて投資活動を行った結果、損害が発生したとしても、弊社はその責任を負うものではありません。●本誌に掲載されている内容の著作権は、株式会社ゴールドリンクに帰属します。弊社に無断で転用、複製等することは固くお断りします。